様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５８９

研究課題名（和文）英語の母音の史的音量変化の研究

研究課題名（英文）Studies in the diachronic quantitative changes of English vowels

研究代表者
藤原　保明（FUJIWARA, Yasuaki）

聖徳大学・文学部・教授

研究者番号：３００４００６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：　古英語期の同器官の子音連結（-ld, -rd, -nd など）に先行する強勢短母音の長化は2番目の有声阻害音の影響による「伸長」であり、最初の共鳴音（[l, r, m, n] など）は関与しないとみなすことによって、この長化に係る種々の問題を解決した。
　中英語期の2音節語の開音節における強勢母音の長化は、無強勢の完全母音があいまい母音化したことに伴う代償長化と、その後のあいまい母音の脱落に伴う代償長化の2段階の史的過程とみなすことによって、この長化の再短音化、長化の時期と方言間の格差などに係る諸問題を解決した。

研究成果の概要（英文）：We ascribe the lengthening of stressed short vowels preceding the homorganic consonant clusters such as -ld, -rd, -nd to stretching of vowel quantity caused only by the following voiced obstruents but not by the clusters, whic leads us to make satisfactory explanations to the various problems involved in the lengthening in question.
As for the lengthening of stressed vowels in open syllables of disyllabic words we assume a process of two stages, tha is, compensatory lengthening as an outcome of the change of unstressed vowels with full quality into schwa and also a compensatory lengthening caused by the subsequent loss of schwa, which enables us to solve several problems such as the later shortening of the lengthened vowels, the periodical differences of the lengthening, and the dialectal differences of the lengthening.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：古英語　中英語　音量変化　子音連結　開音節　代償長化　有声阻害音　伸長

１．研究開始当初の背景

古英語期における音量の調整

9 世紀ないしは古英語期の終わりまでに、強勢のある短母音は、ald>āld ‘old’, word>wōrd ‘word’, findan>fīndan ‘to find’, camb>cāmb ‘comb’ のように、同器官の（すなわち、調音点が同一または類似の）子音連結（-ld, -rd, -nd, -mb など）の前で長化した（Berndt（1960: 17 -20), Luick（1964: 242-6)）。しかし、従来の研究では、このような特定の時期の同器官の子音連結の前に限って強勢母音が長化した原因を解明するには至っていない。この長化とは対照的に、1100 年以前の古英語末期までに、3 音節語の第一音節にある強勢長母音は crīstendōm>cristendom ‘Christendom’, hāligdæg>haligdæg ‘holiday’, sūþerne>suþerne ‘southern’, scēpheorde>scepheorde ‘shepherd’ のように短化した（Fisiak（1968: 31), Jordan（1968: 43-4))。しかし、この短化現象の動機や仕組みについても、先行研究は納得のいく説明を提示していない。

中英語期における音量の調整

一方、北東中部方言と北部方言の一部では、2 音節語の開音節中の強勢母音は 1200 年以前にすべて長化し、その他の地域では OE mete [ˈmete] ‘meat, food’>ME mēte [ˈmɛːtə], OE macian [ˈmɑkiɑn] ‘to make’>ME māken [ˈmɑːkən], OE nosu [ˈnozu] ‘nose’> ME nose [ˈnɔːzə] のように、/a, e, o/ だけが長化した（Berndt（1960: 25), Jordan（1968: 44-6))。（なお、ここでは語レベルの主強勢は当該音節の直前に ‘ˈ’ で示す。）この音量変化についても、従来の研究では変化の動機や仕組みについて納得のいく説明はなされていない。なお、北東中部方言と北部方言の一部で生じた音量と音質の同時変化（/i/>/eː/, /u/>/oː/）については本研究では考察の対象外とする。

従来の研究の問題点

英語の通時的音韻研究はこれまで現象面での記述や一般化に終始していたわけではなく、たとえば、母音の弱化や子音の同化については、強勢の有無や音環境などの明確で具体的な要因が介在していることから、このような音変化の動機や原因についての従来の説明には説得力がある。しかし、上で述べた 2 種類の音量変化については、時期や音環境などが明白であるにもかかわらず、従来の研究はそのような変化の要因や仕組みに関する疑問を解消するには至っていない。

研究代表者の史的研究の基本姿勢と成果

研究代表者はこれまで英語史、とりわけ音韻・韻律・語形成などの分野の研究を行い、著書・論文・口頭発表にその成果を発表してきた。その基本姿勢は史的変化の事実の提示にとどまらず、変化の原因の解明にも努めることであった。たとえば、博士論文『古英詩韻律研究』の場合も、ゲルマン古詩では脚韻でなく頭韻が用いられたのはなぜか、長行が半行に分割されているのはなぜか、二重頭韻はどうして第一半行だけに生じるのか、などの疑問を解消させるために、ゲルマン古詩から膨大なデータを採取し、徹底した分析と考察を重ね、これらすべての疑問を解消できる韻律の枠組みを提示することに成功した。

本研究に至る経緯

研究代表者は平成 4 年 9 月から 5 年 6 月にかけてロンドン大学でイギリス標準英語における [ə] の脱落について研究を行い、その成果を日本英語学会第 11 回大会で発表し、論文も公刊している（藤原（1994))。この研究が契機となり、平成 20 年～22 年度は科学研究費補助金の支給を得て、後期中英語の形容詞の語尾の消失過程の研究を行った。その研究を通して、予想外の示唆が得られ、上述の音量変化の動機や過程に納得のいく説明ができる道が開けた。すなわち、複数形の標識であった形容詞の語尾 -e（音声的には [ə]）が中英語後期に脱落した要因の考察中に、同器官の子音連結の前での強勢母音の長化は [ə] の出現以前であるが、2 音節語の開音節における強勢母音の長化は [ə] の出現以後であることに気付き、このようにまったく異なる条件下で生じた 2 種類の長化には別個の説明原理が必要であるという結論に達した。そして、この説明原理についての考察は、平成 21 年 7 月 4 日開催の第 14 回英語発音・表記学会での講演原稿の作成中に深化した。

すなわち、O’Connor（1980), Cruttenden（2008), Wells（2009）などで指摘されている現代英語の阻害音（obstruents）が先行母音に及ぼす音量の伸長（stretching）・短縮（clipping）という現象は、文献時代以前に生じた子音変化（すなわち「グリムの法則」の① /p, t, k/>/f, þ, x/, ② /b, d, g/>/p, t, k/, ③ /b^h, d^h, g^h/>/b, d, g/）にさかのぼって考察す

べきものであるということである。

さらに、Bolinger (1981) が提唱し、Faber (1986) が英語の発音教育に応用している現代英語の音価と発音時間に関わる「借用」(Borrowing) という概念から、中英語期における開音節中の強勢母音の長化現象の説明について重要な示唆が得られた。ちなみに、この「借用」という概念は完全音価を維持している母音と弱化母音 [ə] を含む同一語内での音量の調整に関するものである。

そもそも、[ə] が出現する以前の古英語では、母音はすべて完全音価を維持しており、母音の音量は弁別的 (distinctive) であり、音節にも量的な差があるモーラ言語であった。ところが、[ə] が出現すると、音量に関与しない弱くて短い [ə] は語全体の音量を減少させることになったことから、このことが開音節の強勢母音を長化させ、結果的に語全体の音量を調整しようとする力が作用したと考えられる。古英語期の長音化の場合、文献以前に有声帯気音の /b^h, d^h, g^h/ が無声帯気音 /b, d, g/ に変化したことから、この /b, d, g/ は /p, t, k/ と「声」(voice) の有無において新たに対立することになり、この有声閉鎖音は現在と同様、古英語期中に先行母音を伸長させ、逆に無声閉鎖音を短縮させる機能を持つようになり、語全体の音量調整が図られたと考えられる。

２．研究の目的

古英語の強勢母音は、1100 年頃までに -ld, -rd, -nd, -mb などの子音連結の前では長化したが、その他の子音連結の前と 3 音節語の第一音節では短化した。一方、中英語の強勢母音（とりわけ /a, e, o/）は、1200 年以前に 2 音節語の開音節で長化した。このような英語の母音の史的音量変化について、これまでの研究では現象の記述と一般化はなされてきたが、大規模な変化を引き起こした言語的要因や変化の仕組みの解明は成功していない。そこで、本研究では、従来の研究を精査した上で、文献以前の時代に生じた音変化と現代英語に見られる音声現象との関連を探りながら、英語史上最も大規模な 2 種類の音量変化の要因とその仕組みを解明することを目的とする。

３．研究の方法

古英語期の同器官の子音連結の前での強勢母音は、二番目の閉鎖音が無声音 /p, t, k/ の場合には長化せず、しかも長母音の場合には短化したことから、閉鎖音の有声・無声の対立は先行母音の音量の増減に深く関わっているはずである。それゆえ、古英語のみならず現代英語における母音の音量について先行研究を精査した上で、母音の史的音量変化について音声学と音韻論の両面から分析と考察を行う。次に、中英語の 2 音節語の開音節における強勢短母音の長化について、現代英語の語レベルの「等時性」という現象、および Bolinger (1981) の提唱している「借用」という概念などを援用しながら、従来よりも広い視点から分析と考察を行い、中英語後期において語全体の音量がどのように調整されるかについて、新たな説明原理を提案する。

４．研究成果

平成 23 年度の主な課題であった -ld, -rd, -nd, -mb などの同器官の子音連結に先行する強勢短母音の長化に係る種々の問題点は、子音連結に［-rð-］という同器官ではない子音が含まれること、および最初の子音は有声の共鳴音に限られることから、長化の原因は二番目の有声阻害音のみであり、この子音の影響によって先行の母音のみならず共鳴音も「伸長」したとみなすことによって、すべて解消できることを実証した。伸長は話者・聴者によって音量の幅がある異音であることから、長いと判断されれば長母音となるが、そうでない場合は、短母音の長めの異音に留まる。この相異が後に地域によって音量の判断の差となって現れる。従来、後に再び短母音化したとみなされている現象は、この異音の解釈が話者・聴者によって異なったことに基づく。なお、先行母音と共鳴音に対する有声阻害音の伸長作用は古英語のみならず現代英語においても広く生じる普遍的音声現象である。

この新たな解釈は通説を覆すのみならず、長化の時期や地域などにみられる多様性についても合理的な説明を施すことができるものとなっている 。それゆえ、本研究の主張は英語音韻史上の 3 つの大きな音変化のメカニズムの研究に大きく貢献できる成果であるといえる。

平成24年度の主な課題であった中英語の2音節語の開音節における強勢母音の長化の仕組みの解明については、従来のあいまい母音の脱落にのみ基づく「代償長化」説を退け、無強勢の完全母音のあいまい母音化に伴う代償長化と、その後のあいまい母音の脱落に伴う代償長化の2段階の史的過程を想定することによって長化が生じたという説を提案した。音量が完全母音の半分程度しかないあいまい母音の出現によって、モーラ言語であった英語は非モーラ言語となり、それに伴って均質的（homogeneous）であった長母音の音量は異質的（heterogeneous）となり、新たな二重母音を出現させることとなった。この解釈は15世紀から300年かけて生じた「大母音推移」の仕組みをも統一的に説明し得るものであることから、英語史を中心とする学界の今後の研究に大きな示唆を与えるものとなっている。

平成25年度の成果は、大半が過去2年間のまとめと作成中の論文であるが、まとまったものとしては近代英語協会での口頭研究発表があげられる。この研究では、-man を第二要素とする複合名詞（以下、-man 複合語）の第二要素の完全母音があいまい母音化し、数の区別が中和する現象を通時的に説明している。すなわち、-man 複合語は第二要素の弱化の有無に応じて4つの型に分類できるが、成立後400年以上経過したものは数の区別なく弱化するが、成立後100年程度のものは単数形も複数形も -man は完全音化を維持していること、さらには、その他2つの型は弱化の途上にあるが、いずれも通時的に移行している、というきわめて興味深い説明を提示することに成功している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

① 藤原保明、同器官の子音に先行する英語の母音の音量変化、聖徳大学研究紀要、査読有、第24号、2014、63-68
② 藤原保明、開音節における強勢母音の長化、聖徳大学言語文化研究所論叢、査読有、21、2014、229-241
③ 藤原保明、諺研究の展望―動物の諺の分析―、聖徳大学大学院言語文化研究、査読有、第12号、2013、1-13
④ 藤原保明、14世紀末におけるthereの文法上の機能、聖徳大学研究紀要、査読有、第23号、2013、61-67
⑤ 藤原保明、there構文はいつ存在文となったか、聖徳大学言語文化研究所論叢、査読有、20、2013、263-279
⑥ 藤原保明、英語の母音と表記の対応について、聖徳大学大学院言語文化研究、査読有、第11号、2012、1-10
⑦ 藤原保明、英語の二重母音の制約について、英語の発音と表記、査読有、7、2012、1-12
⑧ 藤原保明、英語の連結母音の共時的・通時的研究、聖徳大学研究紀要、査読有、第22号、2012、63-70
⑨ 藤原保明、Jun Terasawa著 Old English Metre: An Introduction、東京大学大学院総合文化研究科　言語・情報・テクスト、査読有、18、2011、93-96
⑩ 藤原保明、英語の語彙の通時的研究について、聖徳大学大学院言語文化研究、査読有、第10号、2011、1-12

〔学会発表〕（計6件）

① 藤原保明、複合名詞の第2要素における母音の弱化について、近代英語協会第30回大会、2013年7月6日、愛知大学名古屋キャンパス
② 藤原保明、英語の母音の表記と対応のずれについて、英語発音・表記学会第17回大会、2012年7月7日、茨城キリスト教大学
③ 藤原保明、開音節における強勢母音の長化について、近代英語協会第29回大会、2012年5月25日、青山学院大学（東京）
④ 藤原保明、英語の二重母音の制約について、英語発音・表記学会第16回大会（招待講演）、2011年7月9日、茨城キリスト教大学
⑤ 藤原保明、英語の母音の史的音量変化について―同器性子音連結の前での母音の長化を中心に、近代英語協会第28回大会、2011年5月20日、福岡女子大学
⑥ 藤原保明、英語の研究―入門から研究まで、IRICE英語教育学会第20回年次大会（招待講演）、2011年4月23日、東京家政大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
藤原保明（FUJIWARA, Yasuaki）
聖徳大学・文学部・教授
研究者番号：30040067

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：